

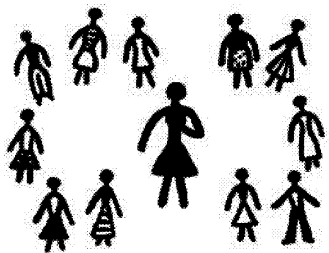
がん社会 を診る

中川 恵一

前回は、俳優の渡辺謙さん(56)が早期の胃がんを内視鏡手術で切除したことに触れました。実は妻で女優の南果歩さん(52)も、乳がんの手術を受けていたと報道されました。渡辺さんは妻と娘の勧めで人間ドックを受診し、胃がんを早期に見つけました。自身のツイッター(短文投稿サイト)でも2人に感謝の意を表しています。

しかし、夫の胃がん発見で、今度は妻の南さんも人間ドックを受診し、乳がんを早期に見つけることができたわけです。南さんはブログに「謙の命を救ったのではなく、私の方こそ謙の病から救われた命です」と記しています。

乳がんは、女性の部位別のがん罹患(りかん)率で、1999年以来ずっと1位となつています。2015年の全国推計値では、年間の罹患数は8万例を超えています。



イラスト・中村 久美

乳がん診断、日本人は難しく

日本女性が一生の間に乳がんになる確率は8%、つまり12人に1人が発症する計算です。罹患率のピークは40代後半から50代前半です。タレントの北斗晶さん(48)も昨年、乳がんの手術を受けました。乳がんは再発リスクはあるものの、早期なら胃がんと同じく大半のケースで完治します。そして、早期発見の鍵は自己触診と乳がん検診です。乳がん検診は2年に一度のマンモグラフィ(乳房エックス線撮影検査)です。徐々に増えているとはいえ、受診率は4割以下で、欧米の半分程度にとどまります。

検診は重要ですが、万能ではありません。マンモに向かない乳房もあるので要注意です。乳がんは白い影として映し出されず、乳房に脂肪がたくさんあって黒く写る部分が多いケースでは、比較的容易にがんを見つけることができます。欧米の女性はこのタイプが一般的です。

これに対して、脂肪が少なく乳房全体が白く映る「デンスブレスト(高濃度乳腺)」の女性では、雪山で白いウサギを見つけるようなもので、乳がんの診断は困難になります。50歳未満の東洋人女性の8割はこのタイプといわれ、とくに日本人では、50歳以上でも8割がデンスブレストだといっデータもあります。

デンスブレストの場合は、マンモのほかに超音波検査も有効ですが、日本では自分のタイプを知る仕組みがないのが問題です。

(東京大学病院准教授)